

生き残り

参戦勇士9人が語る

# 「南京事件」の真実

二十歳で従軍した若者も、今や九十歳。

南京攻撃に参戦した兵士たちは年々、少なくなっている。

昭和十二年十二月の南京で、いったい何が起こっていたのか。彼らはいったい何を見、何を見なかったのか。

大虐殺はあったのか、なかったのか。

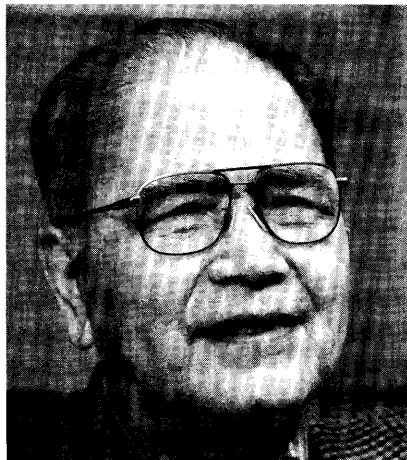
七十年を経て今、語られる「南京事件」の真相。



インタビュー。構成

富澤繁信

# ●参戦勇士9人が語る「南京事件」の真実



とみざわ しげのぶ

1926年横浜生まれ。旧制神奈川県立第一中学校、旧制第一高等学校文科を経て東京大学文学部ドイツ文学科卒業、更に同大学経済学部経済学科入学。戦後の51年、住友信託銀行入社。審査部長、経理部長、神戸支店長を経て取締役、常務。退任後は住商リースで副社長。88年退任。「新しい歴史教科書をつくる会」の創立に参加、組織委員長を務める。日本「南京」学会理事。著書に「南京事件の核心」「南京安全地帯の記録」完訳と研究、「南京事件」発展史」など（共に展転社）。

今回の証言者  
九人のうち六人

團は太湖の南側を西に進軍し南京に攻め上り、南京城を攻略した（詳しくは6ページの「主要師団の南京進撃図」参照）。

この「南京戦」に参戦された勇士達の証言が以下に集められているが、その前に「上海戦」と「南京事件」のことについて簡単に述べておきたい。まず上海戦であるが、「ここに日中戦争の基本的な性格が現われている」というのが最近の我々の見解である。蒋介石は大軍を上海並びにその附近に集め、堅固なトーチカを作った。十分に準備が整ったところで「大山大尉殺害事件」（八月九日、自動車で

## はじめに 中支那方面軍の結成

上海戦は、はじめ小部隊で対応していたが、苦戦の連続であったため、昭和十二年九月下旬より増強されることとなり、第九師団（金沢）、第三師団（名古屋）、第十一師団天谷支隊などが配置された。これらは上海派遣軍と称され、松井石根大将が総司令官であった。

しかし戦局は、なおいっこうに進

捗しなかったため、十一月には第十軍が第六師団、第百十四師団、国崎支隊等をもって結成され、十一月五日杭州湾に上陸した。また北支より第十六師団が転用され上海派遣軍に所属することとなった。上海派遣軍と第十軍は中支那方面軍と称され、松井大将が総司令官となった。

上海派遣軍麾下の主要師団である第九師団（金沢）、第十六師団（京都）は上海から太湖の北側を回って南京を目指し、一方、第十軍麾下の第六師

（近藤平太夫氏・齋藤敏胤氏・喜多留治氏・納谷勝氏・稲垣清氏・市川治平氏）が上海派遣軍所属であり、二人（古沢智氏・永田尚武氏）が第十軍に所属していた。残りの一人野中祥三郎氏は独立輜重兵であった（詳しくは43ページの「南京攻略戦主要部隊一覧」参照）。

## 序論 上海戦・南京事件の基本的性格

巡察中の大山勇夫中尉が上海虹橋飛行場付近で中国保安隊に射殺された事件)を起こし、日本を日中戦争に引きずり込んだのである。

日本は安易に考えこれに応じたので、上海戦では大変に苦勞した。上海のすぐ西北の所に蘇州河という川が上海に向かって流れている(45ページの図参照)。この川の渡河作戦で「上海戦」は終わるのであるが、上海上陸以来それまでの二十キロを進むのに一カ月余もかかった。

蘇州河から遙か彼方の南京までの三百数十キロは約三十日で進軍している。一日約十キロである。この進軍速度だけを見ても「上海戦」がいかに準備万端仕組まれた戦いであるかが分かる。これが日中戦争の基本的性格である。

なおこの「上海戦」の苦戦に終止符を打ったのは、杭州湾に上陸した第六師団の動きである。第六師団は

上海の西方の崑山に急行して中国軍の退路を断とうとしたので、中国軍は動揺し上海から退却したのである。

それでは「南京事件」はどうだろうか。私は「南京事件」が虚構であることは次の事実を指摘すれば、極めて簡単に立証できると思っている。

### (1) 虚構は簡単に立証

南京事件を研究するにあたって、私は先ず「南京事件のすべて」というデータ集をつくった。

これは当時の第一次史料の中にある南京事件に関するデータを集めたもので、約六千個のデータからなっている。東中野修道亜細亜大学教授が「これには南京事件のすべてが載っている」と評されたので「南京事件のすべて」と名付けた。

私は、南京事件が虚構であることは、このデータ集に依拠すれば極めて簡単に立証できると思う。

まず「南京事件」という呼称がす

でに間違っている。南京市民は、一九三七年十二月十三日に日本軍が南京に入城する前に、残留していたアメリカ人を中心とする「国際委員会」が作った「南京安全地帯」という南京城内のほんの一区画に過ぎないところにほとんどすべてが集められていた(7ページ地図参照)。安全地帯の外は従ってほぼ無人地帯で、そこでは虐殺、強姦などの事件は起こりようがなかった。

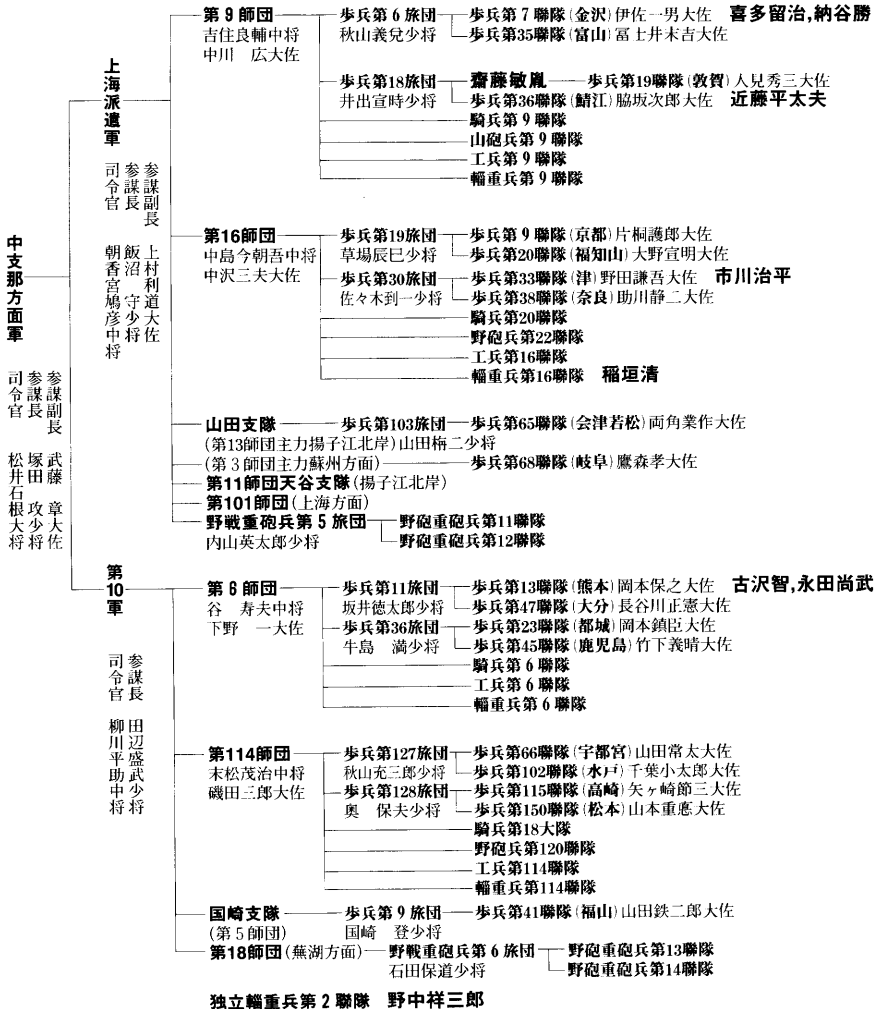
つまり、中国側が、日本軍は城内に侵入するやいなや「人とみれば殺し」「女と見れば犯し」と言っているのは全くのウソで、「南京事件」という事件はなく、あるとすれば「南京安全地帯の事件」なら考えられる。

では、「安全地帯」の中ではどうであつたろうか。

安全地帯は皇居前広場の四倍しかない狭い地域で、そこに約二十万の

# ●参戦勇士9人が語る「南京事件」の真実

## 南京攻略戦主要部隊一覧



南京市民が密集していた。しかもこの人数は、日本軍入城以後、一貫して増えこそすれ減少していない。国際委員会は住民の食糧を引き受けていたので、人口については敏感であったはずである。その彼らが人口の減少を一度も言っていない。常に「人口は二十万だ、二十五万だ」と言っているのである。要するに、安全地帯の中では目に立つ殺人はなかったということである。

また、安全地帯を警備した日本軍は金沢聯隊の第一、第二大隊で、合わせて千六百人ほどであった。しかも、日本兵は夜間の外出を禁止されていた。それなのに、日本兵は一晚に千人もの女を強姦したという。荒唐無稽な話である。

以上で南京事件が虚構の話であったことが分かる。

しかるに、この虚構は時とともに所を変え、人を変えて、肥大化発展

して、それぞれが他の大きな目的に奉仕するプロパガンダの役割を果たしていた。それは、次の四つの段階に分けて考えることができる。

①「原初的南京事件」、②「ベイツ南京事件」、③「東京裁判南京暴虐事件」、④「朝日新聞（中国共産党）南京大虐殺事件」がそれである。

## (2) 虐殺派の勢いは低下

①「原初的南京事件」はアメリカ人、特に宣教師が唱えたものである。彼らが「安全地帯」を作ったのは、南京城内で日中両軍が市街戦を行つたならば、街が戦禍を被り住民の被害が大きくなることを懸念し、戦闘に中立な安全地帯を作つて住民と自分たちを守ろうとしたからである。

しかるに、日本軍の入城の前に中国軍は逃亡し、日本軍は平和裡に城内に進入したので、日本軍入城とともに、安全地帯はすでにその必要性

を失っていた。

だが、アメリカ人の宣教師たちは安全地帯の存続に固執し、住民の住居と食糧の配分権を握つて、彼らを行政的に支配しようとした。しかしこれは日本軍の占領政策に違背することが多く、日本側はこの動きを止めさせようとしたため、日本軍とアメリカ人との間には確執が絶えなかった。

そこでアメリカ人たちは、日本軍が兵士を統制できず、兵士は残虐行為をして住民を苦しめているという噂を集めて日本側に突きつけ、自分たちが行政を司る必要があると主張した。この集積が『南京安全地帯の記録』という日本軍の暴虐事例集となり、後の「南京事件」の骨格をなしたのだ。

食糧と住居を握られた中国人は、アメリカ人の意のままに動いた。宣教師たちがこういう行動をとったの



は、南京市民を日本軍に渡さないことで中国に恩を売り、布教上の地位を有力にするためであった。

これを私は「最初の南京事件」と呼んだが、そこではただ日本軍の無統制を立証できればよく、殺人など、事件の種類やその程度は問題ではなかったのである。

そして、この日本軍の暴虐事例は国民党政府の直ちに利用するところとなった。蒋介石の顧問をしていた南京大学教授のベイツがその意を受け、この事例を

『戦争とは何か』を通じて編集し直し、「南京安全地帯の事例」から「南京事件」を作り上げたのだった。中国の首都南京で起こった罪もない市民の大量殺人事件、つまり戦時プロパガンダとして使えるようにし、諸外国に日本軍の戦時における残酷性を示すものとして宣伝したのである。

これを、私は②「ベイツ南京事件」と呼んだ。それでも、その市民殺害の規模は一万二千人とモデルートなものであった。

その次の段階である③の「東京裁判南京暴虐事件」は、戦勝国が日本人を精神的に再起不能にするため、市民殺害問題はドイツのアウシュビッツにも比すべきものとし、その規模は大幅に上げられ、軍民合わせて二十万余とされた。

しかし、裁判に出廷したのは当時南京にいた外国人主体であったので、彼らが主張したのは②の「ベイツ南

京事件」であり、二十万余の殺人を立証することはできず、判決は戦後に現われたいかがわしい「埋葬資料」に頼らざるをえなかった。

その後、「東京裁判南京暴虐事件」はしばらく忘れられていたが、一九八〇年代に至り、中国側と日本の左翼側との協同によって、中国側は対日本外交において南京事件を有力なカードとして使うようになり、日本側も朝日新聞や左翼文化人などがこれを利用して、勢力拡大の材料として使うようになった。これが④「朝日新聞（中国共産党）南京大虐殺事件」であり、殺害された軍民は三十万余

に肥大化された。

近時、国内的には虐殺派の勢いは低下している。だが、本年は「南京事件」七十周年であり、外国を中心に様々の動きがあると予想されている。適切な対応が必要であろう。（拙著『南京事件の核心』『南京安全地帯の記録完訳と研究』『南京事件』発展史』展転社刊参照）。（新しい歴史教科書をつくる会『史』六十一号、平成十九年三月号より）

以上が「南京事件」の基本的性格である。以下、勇士たちの証言は、「南京事件」を否定する根拠をよく伝えていと思う。

の中、ぬかるみの中を強行軍したが、目的達成は不十分で、敵は血路を開いて逃げて行った。

## 2・崑山から雨花台へ

敵の後を追いながら強行軍した。ときに逃げる敵を銃撃することもあった。

補給はすべて現地調達に頼った。これは徴発で代金支払いはほとんどなかった。住民は逃げて居なかった。これは徴発で代金支払いはほとんどなかった。住民は逃げて居なかった。従って住民に対する強姦などの加害もなかった。

# すぐに南京から出た

## 古沢智氏の証言

### 3・雨花台の戦闘（十二月十日）から城門へ

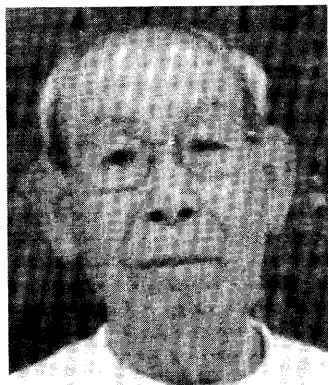
これは大激戦であった。撃ち合いが始まるやいなや、私の戦友二人が倒れた。しかし我々は最右翼を担当したのでまだしも楽であった。ここ

1・杭州湾上陸（昭和十二年十一月五日）から崑山（十一月十五日）

まで

上海の敵軍の退路を断つため、雨

# ●参戦勇士9人が語る「南京事件」の真実



古沢 智

1916（大正5）年生まれ。  
当時歩兵第13聯隊第1大隊第1中隊、第1  
小隊第1分隊。

そこへ突如、部隊の城門外への退去命令が出た。我々は退却する敵を追ってこれを殲滅したか

ある。このような我々が、どうして三十

が終わると、護城河の渡河、城壁制圧となり、これは先発部隊が大いに苦勞したところであるが、我々は最右翼を担当したので、先発部隊の苦勞の後をついていったのである。雨花台と川の間にある雨花台街は全くの廢墟で何もなく（中国の清野作戰の影響）、現在の街並みとは全く異なるものであった。

十二日深夜から十三日午前深夜にかけて、敵は城門を閉めて逃亡したのであるが、城門外で日本軍の攻撃をくい止める使命を帯びた中国兵は取り残され、哀れにも我々の銃火に

殺されることとなった。

## 4・南京入城

中華門は四層のトンネル状（下の写真）をなしていたが、その各々の内側には厚い土囊の壁があった。我が工兵隊がこれをどうやって排除したか分からないが、我々は門を開けて入った。

## 5・帰還命令

城内にはいると、敵兵は誰もいず、また民家に住民は潜んではいたらしいが姿は見せなかった。百メートルほど進むと一老婆が手製の日の丸の旗を掲げて、我々を迎える風であった。

つたのであるが、谷師団長は無益な殺生は避け、敵に退却する時間を与えようとの意思であったと聞いている。我々は命令に従い城門外に退去し、その夜から雨花台街のはずれに宿営し、二度と城門に入ることはなかった。そして十二月十七日、南方の蕪湖へ向けて南京を後にしたのである。



中華門は四層のトンネル状になっている  
（撮影／富澤繁信、平成16年3月）



万人虐殺に加担することなどであろうか。

### 【解説】

①上海戦で日本軍が苦戦したこと  
は「序論」で述べた。杭州湾に上陸した第十軍のうち、熊本師団は上海の中国軍の退路を断つために崑山に急行軍で向かったが、中国軍は上海戦の最後の戦い（上海郊外蘇州河）で十一月九日には総退却し、南京方面に逃げ去ったので、熊本師団のこの動きは間に合わなかった。

ただ中国軍に退路を断たれるという恐怖を与え、上海戦を終結させる効果はあった。強行軍のため崑山作戦には大砲は持って行けず、歩兵砲を担いで行った。次の証言者永田氏はその苦勞を述べている。

②古沢氏の歩兵第十三聯隊の第一大隊は、南京への進撃の先頭部隊であったので、時に中国軍の南京退却

中のものと遭遇し、戦鬪を交えることがあった。次の証言者の永田氏の同聯隊第三大隊は後統部隊であったので、呑気に、「敵兵との戦鬪もなく、ワイワイいいながら進んだ」と言っている。

③熊本師団は南京の南の正門の中華門を攻略した。中華門の南には川幅数十米の護城河があつて敵の侵入を防ぎ、川を渡ると雨花台街があり、さらにその南には雨花台台地があつた。この台地には沢山のトーチカがあつて、南京防衛の複廓陣地の一環をなしていた。

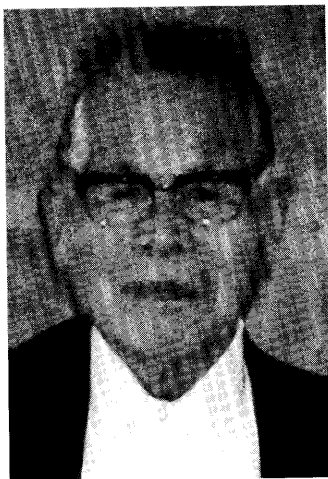
の証言するように、雨花台のトーチカも同様であった。

雨花台の攻撃は左から歩兵第二十三聯隊（都城）、歩兵第四十七聯隊（大分）、歩兵第十三聯隊（熊本）とならんで攻撃し、熊本聯隊は右から第一、第二、第三大隊とならんでいた。敵の攻撃が激しかったので、古沢氏の第一大隊は敵の攻撃が少ない方であつたが、それでも氏の証言する如く戦鬪が始まるやいなや、氏の戦友が倒れた。それほど南京防衛の最後の砦である雨花台の戦鬪は激しかったのである。

複廓陣地とは中山門防備の紫金山の陣地、光華門防備の淳化鎮陣地、中華門防備の雨花台陣地などをいい、いずれも多くのトーチカを備えていた。紫金山のトーチカには「名古屋の動物園の象のように足を鎖でつなされた中国兵がいて、死ぬまで機関銃を握っていた」。次の証言者永田氏

④中華門は多層のトンネル状をなしていて、難攻不落であつたが、前述の如く、十二月十二日の夜、中国軍の城門守備隊は全軍が退却を始めたので、この門も攻略することが出来た。しかし各トンネルの後には土嚢が積んであつた。

土嚢は爆弾で消去しようと思つて



永田 尚武  
1916(大正5)年生まれ。  
南京戦当時上等兵。歩兵13聯隊第3大隊  
歩兵砲小隊。

# 安全地帯には入らなかつた

## 永田尚武氏の証言

も、いったんは舞い上がるが、やがてまた砂は地上に降りてくるので爆弾では取り除けない。「もっこ」などで人力で除去したのであろうか。古沢氏は「我が工兵隊がこれをどうやって排除したか分からないが」と言

って、その苦勞を偲んでいる。  
⑤古沢氏の部隊はいったん入城後、すぐ城外へ引き戻されて、ほとんど廢墟に等しい雨花台街の外れで宿營し、十七日には蕪湖へ向けて南京を去っている。

1・杭州湾(十一月五日)から崑山(十一月十五日)まで

この期間は一番苦勞した。上海の

敵の退路を断つため、雨の中、泥濘でいねの道を強行軍しなければならなかつた。あまつさえ、我々(歩兵砲小隊)

は砲を分解して運ばなければならなかつた。

### 2・雨花台までの道

これに引き替え、嘉興(十一月十九日)から雨花台(十二月十日)までの道は、楽なものであつ

た。大きな道を各隊とも競争してワイワイ言いながら進んだ。敵兵と戦闘もなく、中国住民ともほとんど会わなかつた。ただ食糧は現地調達で苦勞した。徴発であつた。住民は逃げてしまつていたので、住民との間にトラブルはなかつた。

### 3・雨花台の戦い

激戦で苦勞した。我々第三大隊は最左翼を進み、敵機関銃をまともに受けた。トーチカには足をつながれていた中国兵がいて、銃を死ぬまで猛射してきた。

当時の雨花台は何もなかつた。

### 4・入場

護城河の渡河、中華門攻略は先発部隊が苦勞したが、我々歩兵砲小隊はその後からついていったのである。歩兵第十三聯隊第十中隊が城内を掃討した後に我々は入城した。

我々歩兵砲小隊は中華門を楽に通過したが（十三日朝）、入城してみると、住民や敵兵のいないところを進み、敵兵の遺失物の片付けが主な仕事となった。蒋介石の家の前を通り、安全地帯らしきところまで進んだが、

そこには住民が沢山おり、日本兵が他の日本兵の侵入を防御していた。

## 5・城内駐屯（十三日より二、三日）

我々は安全地帯の中には入らず、城内に駐留した。住民は近所において、日本人らしい女（あばただったが美人）とその夫と会話したりして平穩に過ごした。

## 6・転進

十二月十七日、我々は中華門とは異なる門から（水西門か）蕪湖に向けて出発した。南京に残ったのは第

三大隊の第十中隊（入城式のため）だけと聞いている。

### 【解説1】

永田氏は大切に保管されている氏の「軍隊手牒」を面談時に示された。軍隊手牒には各兵士の参加した作戦の公認されたものが記録されている。

そこには今回永田氏が証言された●十一月五日杭州湾上陸、●十一月十七日までの崑山作戦に

参加、●十二月一日〜十二月十三日まで湖州・南京間の戦闘及び南京城攻略戦に参加、●十二月十七日より蕪湖作戦に参加したことが述べられている。

### 【解説2】

証言者永田氏も一旦は

城内に入ったが、すぐ城内の南の城壁の近くで宿営し、わずかに残っていた中国人と平和に談笑しながら十七日には同じように蕪湖に向けて南京を去っている。

熊本師団の他の部隊も同様であつて、彼らは城壁の西側と揚子江の間で、中国軍の敗残兵と死闘を演じてこれを制圧した後、城内にはほとんど入らず、十七日頃より蕪湖に向け



13聯隊が中華門前のクリークを渡る（12月13日）

て南京を去ったのである。従って熊本師団の兵士たちは、南京の住民と接触する機会などはなく、彼らは南京市民何十万虐殺とは無縁であった。しかるに彼らを統率した熊本師団

師団長の谷中将は、南京軍事裁判で部下の南京市民虐殺の罪を問われて有罪とされ、雨花台で銃殺された。冤罪であることは明らかであろう。

## 部隊は命令を守った

### 近藤平太夫氏・齋藤敏胤氏の証言

#### 1・上海戦は大激戦

昭和十二年十月一日、上海虬口碼頭に上陸。以後上海郊外の蘇州河（45ページの図）の渡河は十一月一日に成功、その後敵陣地の制圧に約一週間要した。敵のクリーク、トーチカに悩まされ、また激しい敵の砲火のために我が塹壕から動けないこともあった。南京までの道程は三百数十キロで、二カ月と十日かかったが、この附近の数数十キロだけで、一カ月

余を要したのである。

#### 2・追撃戦と食糧徴発

蘇州河渡河に成功後、崑山（十一月十五日）以後は追撃戦で楽なものであった。金壇（十二月二日）までは我々は食糧にも余り苦労しなかった。金壇以後は第一線はもとより司令部も食糧に苦労するようになった。しかし我々は軍からの指示を忠実に守って、徴発も秩序正しく行った。

① 徴発は司令部の目撃できる範囲の所で行え。

② 住民のいるところでは三分の一以内の徴発にとどめよ。

③ 住民のいないところでは鍵を壊して家屋内に入ってはならない。外にでているものだけ（二分の一以内）の徴発にとどめよ（住民が帰ってきたときに困らないように）。

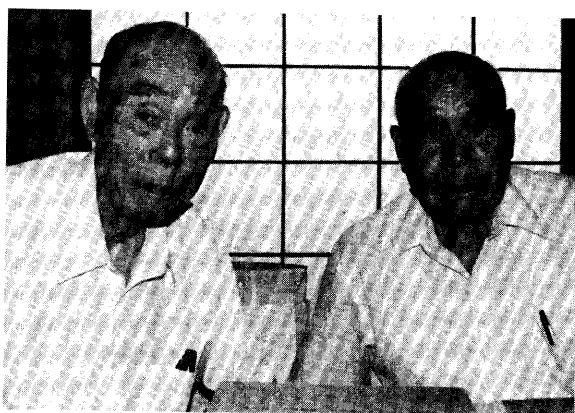
④ 徴発したものの明細書を残して、後で住民の請求に応じて宣撫班が代金の支払いができるようにせよ。

⑤ 徴発したものの明細書は写しをとって、後で本部にきて、徴発の現物との照合を受けよ。

住民は逃げていたが一部落十五人とすれば五人ぐらいいは残っていた。

#### 【解説】

この部隊は本部の命令をよく守ったことがこの証言で分かる。しかし



左：近藤 平太夫

1914（大正3）年生まれ。  
当時歩兵第36聯隊第3大隊第10中  
隊 第2小隊分隊長

右：齋藤 敏胤

1916（大正5）年生まれ  
当初歩兵第36聯隊第3大隊第10中  
隊 後、第18旅団本部に転属

われたので、威力による強奪  
ではなかったことである。

### 3・淳化鎮

淳化鎮は雨花台などに連な  
る南京の最終防衛線であった。  
上海は別として、我々は追撃  
戦でトーチカに初めて遭遇し  
た。

十二月五日から攻撃を始め  
八日までかかって攻め落とし  
た。攻撃に着手する前、敵は  
ガスを使うという情報がい  
り、本部は動揺し、兵たちに

マスクを用意せよという指示を出す  
よう旅団長に進言したが、旅団長は  
動ぜず、事態の推移を見守った。

それは兵たちが行軍の途中ガスマ  
スクが重いので、半分以上の兵が捨  
ててしまっているのを旅団長は知っ

ていたからで、ここでガスのことを  
口にすれば、兵たちの動揺困惑は計  
り知れないものとなると考えられた  
からである。旅団長の判断は適切だ  
った。敵がガスを使ったのは光華門  
攻略のときで、それも催涙ガス程度  
であった。

八日に淳化鎮を落として、光華門  
を攻撃したのは九日であったから、  
この間、暗闇の中、敷き石道を猛進  
撃した。そのために敵の退却軍が南  
京城に向かうのと混じり合って、闇  
のなかを走ったことさえあった。

### 【解説】

「重いガスマスクは半分以上の兵が  
捨ててしまっている」とある。行軍  
中の兵士は三十キロ余の荷物を背負  
っていたので、紙切れ一枚でも余分  
なものは捨てていた。

他の部隊はこの命令はよく承知して  
いたが、あわたたしい徴発行為のた  
め、必ずしもその通り実行できな  
かったことが、他の人の証言にある。

しかし共通して言えることは、行  
軍中の食糧調達には住民不在の所で

# ●参戦勇士9人が語る「南京事件」の真実

## 4・光華門攻略と南京一番乗り—— 伊藤第一大隊長の壮絶な戦死

旅団隷下の歩兵第三十六聯隊（長、脇坂大佐）は十二月九日未明五時過ぎ、光華門城外濠の線に達した。敵は城壁上より盛んに照明弾を発射し熾烈な一斉射撃を始めた。当初は聯隊配属砲兵らの射撃で突撃路を開いた。

十日十七時、脇坂聯隊は第一大隊に対し突撃命令を下達し、光華門攻略を命じられた。伊藤第一大隊長が突撃を命令するや、第一中隊（長、山際少尉）は突撃を発令し、第四中隊（長、葛野中尉）もこれに続き、一気に城門内に突入した。

十七時三十分、大隊長も突入したが光華門は二重になっていたので、二つの門に閉じ込められ、城壁上か

ら猛攻を受けた。しかしこれに臆することなく、肉弾攻撃により光華門上に最初の日章旗をひるがえすことができた。

敵は奪還をめざし猛射を浴びせてきた。銃弾はうなり、手榴弾が炸裂して死傷者が続出した。大隊長は「南京一番乗りは天聴に達した。大隊

は全滅を賭して光華門を死守するのだ」と奮戦したが、大隊長も遂に倒れた。

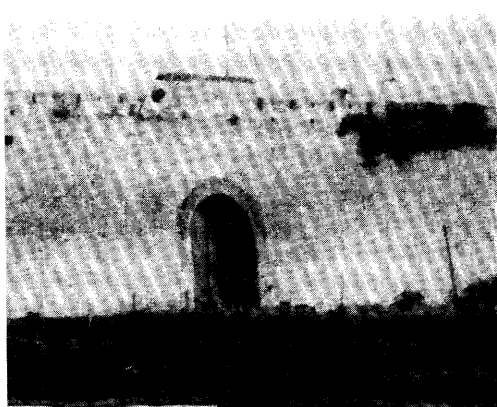
大隊長は伝令を呼びよせ、自分の恩賜の義眼を抜き取り、これを敵の蹂躞じゅうりゃんから守るため聯隊長に届けてくれと頼んだ。同時に本部に城門死守の決意とともに弾薬の補給を求めよう指示し、午後二十一時頃壮絶な戦死をとげた。この門を十三日まで死守し、同日未明、敵の退却により、光華門は完全に制圧した。

### 【解説】

南京一番乗りを主張する部隊は多い。これもその一つであり、一番かどの判定は困難。

二人の城内警見

近藤平太夫氏



光華門に掲げられた日章旗

①光華門制圧後、聯隊は門外の防空学校に駐留した。聯隊は十二月二十四日頃南京を離れることが分かっていたので、我々は一度城内を見学することを許された。見学は団体で、指揮者のあることが必要であった。私が指揮を執り四、五人を引率して



若き日の近藤氏

見学した。二十日頃だと思う。

②難民区は見なかったが、城内は極めて平穩であった。我々は牛蒡劍ごぼうけん（銃劍、帶劍）だけで城内を見学した。中国人は余り見かけなかったが、公園付近に行くと露店が何軒か出ていて、日本兵相手の商売をしていた。靴修理店、散髪屋等である（彼らは日本兵に虐められることなどなく、商売に励んでいたのである）。

③一軒の印鑑屋で、私は南京入城記念の印鑑を作ることを奨められた。私は水牛の印鑑を注文したが、出来上りは明日だということで、翌日たった一人で帶劍だけで取りに行った。それを今でも大切に持っている。

④帶劍は当時の軍人の服装には付き物であったので着けたもので、劍を持たなくても何ら不安はなかった。

### 齋藤敏胤氏

①光華門占領後、旅団司令部は南京城内（光華門から約一キロ北）に入った所に設営したが、隸下の第九、第三十六の兩歩兵聯隊は城外に駐留させた。

通常、司令部の設置は聯隊後方に設置すべきであるが、約一キロも離れた前方に選定したことは、南京城内がいかに治安が確保され平穩であったかの証拠である。

②脇坂聯隊長は従者をたった一人しか連れずに、市内を見学された。難民区に入ろうとしたが、予めの許可なくしては入れられないと憲兵に言われ、黙って引き下がられた。

③司令部でも引率外出が許された。十二月二十日頃、数名とともに中山門歩哨に厳重な人員の確認を受けた後、そこから約四キロの所にある孫

# ●参戦勇士9人が語る「南京事件」の真実

中山先生陵墓に参詣した。

標高約百五十メートルの陵墓から南京市内を一望できる所に立って見下ろしたが、火災などは一件もなく、銃声も聞えず平穏な街であった。この時も帯剣だけの服装であった。

## 【解説】

第九師団と南京市民との接触について考えてみよう。第九師団は二つの旅団からなっていた。一つは歩兵第七聯隊（金沢）と歩兵第三十五聯隊（富山）からなっていた歩兵第六旅団である。

このうち歩兵第七聯隊は住民が密集していた「安全地帯」を担当している、住民との接触があった（その様子は後に述べる）。歩兵第三十五聯隊は中山門の南の「無人地帯」に宿営していたので住民との接触はなか

った。

いま一つの歩兵第十六旅団は歩兵第十九聯隊（敦賀）と本証言者の近藤氏らの所属していた歩兵第三十六聯隊（鯖江）からなっているが、敦賀聯隊は第一公園南に宿営しており、周囲は無人地帯であった。

歩兵第三十六聯隊は光華門外の防空学校に宿営しており、周囲は無人地帯であった。

また第九師団全体は十二月二十四日頃、南京を発って蘇州方面へ転進していったので、安全地帯担当の歩兵第七聯隊を除いては住民と接触する機会はなかった。各部隊と



中国人が南京城内に戻って開いた床屋

も城内見学が少しは許されたであろうが、城内には安全地帯を除いては市民がほとんどいなかったのである。



# 市民は平穏に暮らしていた

## 喜多留治氏の証言

### 1・南京入城

中山門と光華門の間に二カ所の突破口を作り、城内に進入しようとした。真ん中の突破口は失敗し、北と南の二カ所が成功した。敵の守りは猛烈であったが、次第に弱まり、十三日には遂にゼロとなったので侵入

し、その日（十三日）は飛行場まで進んだ（わずかしか進攻していないが、上の命令であった）。

### 【解説】

これは城門攻略ではなく、城門と城門の間の城壁を突破した珍しい例である。

### 2・安全地帯の敗残兵

#### 掃討

十四、十五、十六の三日間、安全地帯の敗残兵を掃討した。十三日の深夜にあった安全地帯巡回

は、自分たちは知らなかった。

掃討にあたっては事前に嚴重に注意事項が上官（聯隊長）より示達された。外国権益への留意、住民に対する配慮、放火失火は嚴重注意、將校の指揮する部隊で実施、十四日は夕刻帰還、無用の他の軍隊の進入禁止、捕虜は一カ所に収容し、その食糧は師団に請求せよなどである。



難民区に潜入していた敗残兵（12月17日）



喜多 留治

1918（大正7年）生まれ。

所属部隊・第9師団第六旅団歩兵第7聯隊  
第1大隊第2中隊満州414部隊。歩兵伍長。

# ●参戦勇士9人が語る「南京事件」の真実

掃討は命令どおり将校指揮のもとに行われ、個人が団体行動を逸脱して勝手に行動することはなかった。捕虜は大隊本部に集めた。彼らがその後どうなったかは自分たちは知らない。ある家屋では表札が掲げられていて、中にはいると敗残兵が多くの武器と共に密集していた。次第に要領を掴んで、先ず家屋の退路を断ち、それから踏み込んだ。

## 3・安全区の住民

難民区には市民が蝟集<sup>いしゅう</sup>していた。しかし彼らは極めて平穩に暮らしており、私は中国警官と一緒にパトロールをしたが、難民の死体が多く通りにごろごろしていたなどという光景は見たこともない。滞在期間中一発の銃声も聞いたことはない。

この安定した治安状況を察してか、

一度は南京から逃げ出した市民も十五日頃から帰ってきた。中心街には露店も出て賑やかになってきたのである。

## 4・転進

部隊は十二月二十六日、蘇州に向けて、転進した。

# 安全地帯警備は軍紀厳正な部隊が担った

## 納谷勝氏の証言

自分は歩兵第七聯隊の歩兵であるが、第三大隊なので安全地帯警備ではなく、知見に乏しいが、その後の調査と研究を交えてお話ししたい。

上海戦に参加したが、十月十九日顔面の貫通銃創で二週間の治療の後、原隊を追いかけ、十二月九日城外の支那工兵学校で中隊に復帰した。

第九師団は上海から上海郊外の蘇州河渡河までで、戦闘能力の七〇%（戦死三千八百三十三名、戦傷八千五

百二十七名）を損耗した。蘇州河から南京まで三百キロ余を約三十日間で強行軍した（十一月十日～十二月十二日。蘇州河までは二十キロを約一カ月余かかった）。

南船北馬の地形で、補給部隊は人力搬送にたよったので大幅に遅れ、部隊は現地調達に頼らざるを得なかった。幸い物資豊富な地方であったので、現地調達ができたが、それは徴発であり、代金支払いを伴うもの



南京外交部跡の野戦病院で治療を受ける敵の負傷兵

ではなかった。炊飯のためには家屋の部材をはぎ取って燃やした。ただ住民は避難していたので、住民に対する加害はなかった。

南京に入城しても、この欠乏状態は続き、南京米であった。日本米が食べたのは入城式の後からである。南京入城と同時に百万俵の米を発見

したというが、それは南京米で、南京住民にも分け与えなければならなかった。

歩兵第七聯隊は安全地帯の掃討で約七千名の捕虜を得たが、その処分は「よきに計らえ」と言うことであった。食糧不足のため、収容した捕虜の間に不安が広まり、暴動が起きたので、やむを得ず銃殺（機関銃）したのだと聞いている。

しかし一般市民に対する加害はなかったと確信する。安全地帯以外には猫の子一匹もいなかった。また日本軍も安全地帯以外にはほとんど常駐していなかったため、事件の起こるはずはない。そして安全地帯は軍紀厳正な歩兵第七聯隊が警備していたのである。

まして日本軍が組織的に、または個別にでも二十万、三十万の難民を虐殺したことなどは到底考えられない。

い。それは安全地帯の難民の数が二十万で、しかもそれが日本軍滞在中少しも減少していないことでも分かる。

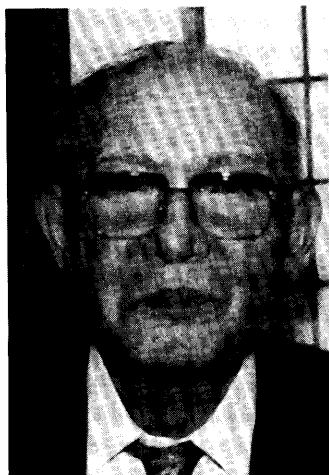
### 【解説】

喜多留治、納谷勝の両氏は歩兵第七聯隊に属していた。この聯隊が唯一安全地帯に密集していた南京市民と接触があり、また安全地帯の中に潜んでいた敗残兵を掃討した部隊であった。

安全地帯の中に密集していた住民との接触については、両氏の証言に特に付け加えることはない。

安全地帯の中に潜んでいた敗残兵については、喜多氏は彼らを検挙した後、彼らがどうなったかは自分には知らないと言っている。しかし摘出された中国兵はその後、揚子江岸で処分されたのである。このことにつ

# ●参戦勇士9人が語る「南京事件」の真実



納谷 勝

1918 (大正7) 年生まれ。  
当時歩兵第7聯隊第3大隊第11中隊第1小  
隊第4分隊 上等兵

いて日本人の論者の中には、捕虜虐殺ではないかという疑義を提出しているものがある。

国際委員会も、当初安全地帯に潜んでいる中国兵は捕虜として扱うべきで、戦時国際法の捕虜として庇護されるべきではないかとの見解を日本側に示した。

これにたいして、日本側は南京城内に潜んでいる中国兵はすべて、安全地帯にいと否とにかかわらず、敗残兵として扱われるべきであるという見解を示し、その後国際委員会

は二度とこの問題を蒸し返すことはなかった。

南京城を守備した中国軍の敗残兵は城の方々に逃げて行った。一つは城の東方、揚子江の南岸を伝って逃亡しようとし、一つは西方の揚子江と城壁の西側の間を通って南に逃げようとし、今ひとつは城内の安全地帯に隠れようとした。

日本軍はこれらをすべて敗残兵として対処した。即ち、抵抗するものは殲滅し、逃亡しようとするものは捕虜とし、降伏しようとするものは捕虜とし、潜んでいるものは城の内外を問わず摘発して処分した。

南京城の東に進んだものは第十六師団が担当し、城の西方を南下しようとするものは第六師団が担当し、城内の敗残兵



南京の防空壕から出てきた女性たち (12月14日)

は第九師団が担当したのである。歩兵第七聯隊の敗残兵掃討はこの原則に則って行われたのであり、それは「捕虜」の虐殺ではなかった。

# 記念写真屋や まんじゅう屋も営業

## 稲垣清氏の証言

聞き手・高山正之

「南京城内の四十五日」の要点を語りたい。

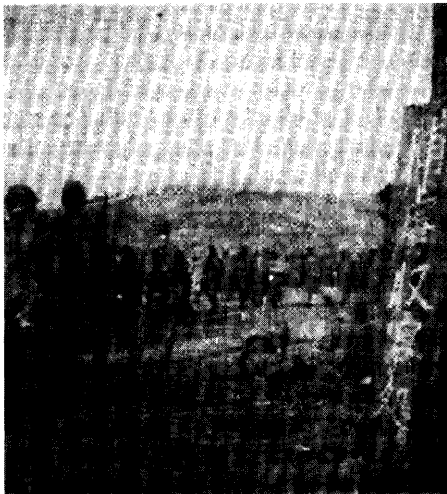
1・私は、昭和十二年八月、召集を受けて第十六師団の獣医官として従軍した。輜重兵連隊だから軍の最後尾で行動するのが形で、南京攻略戦でも陥落後三日目の十二月十六日に南京城に入った。

2・中山門から入ったが、ほとんど人影はなかった。

3・所属する第六中隊は中山東路の北ほぼ一キロのところにある軍官学校に宿営した。この周辺には人家はあるものの住人はほとんどいなかった。

4・中隊はここに四十五日間、つまり一月下旬までとどまり、挹江門シヤンカンの先の下関の野戦倉庫から糧秣りょうま、つまり兵隊の食糧と軍馬のマグサを輜重車ちゆうじゆ(馬車)で運びだす作業を行った。

5・そういうわけで城内を見て歩く機会が多かったが、中国兵の死体は一度も見なかった。南京大虐殺記念館が虐殺のあったとする場所は、私どもが南京に滞在していた四十五日間に幾度となく通った地域であった。虐殺されたという屍体の一つにも、またそ



“捕虜収容処”の文字が見える

の形跡すらも、当時私どもは遭遇したことがなかった。

6・ドイツは蒋介石の国民政府を支援し軍事顧問もいた。そのうちドイツからの軍事援助品と思われるBMWの側車(サイドカー)が何台も見つかった。私の中隊にも一台配属され、それに乗って南京城内を二度見て回った。

# ●参戦勇士9人が語る「南京事件」の真実

7・城外に逃げていた市民も、ぼつぼつと帰ってきて街は年の内になぎわいを取り戻していた。時計屋が最初に店を開き、記念写真屋やら饅頭屋もできてきた。写真屋で記念に纏足女の写真を買い、判子屋で印鑑を作った。

8・南京城から十キロほど離れた上麒麟門という集落到捕虜收容所があつて、八百人ほどの中国兵が捕らわれていた。全員が軍服姿だった。

9・そのうち歩兵部隊が次々と前線に向かい、わが輜重兵聯隊にも捕

虜收容所の監視兵を出すよう命ぜられた。

10・輜重兵部隊はあまり威力のない騎兵銃しかもっていない。正規歩兵部隊が輜重兵に收容所の警備を任せるといふことは、まあ逃げられれば逃げていいというサインでもあつた。

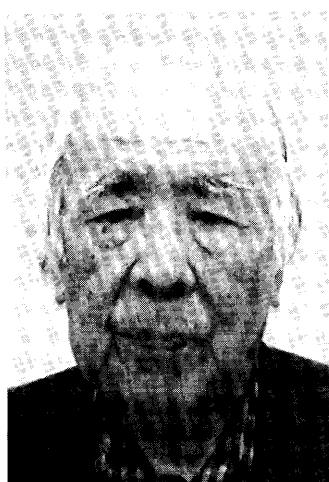
11・実際、この南京を出て次の作戦地、徐州の安庄では百八十九人の捕虜を預かったが、山東省から出稼ぎにきて、そのまま兵隊にさせられた者

が大半だった。

12・それで、夜間の警備を手薄にしてやったら最終的に全員が逃げていった。こんなことはよくあることだった。

当時、南京市の住民の大部分は、難民收容所のあつた安全地帯に隔離され、收容され、保護されており、憲兵と警備担当部隊の厳重なる監視の下に置かれていたので、虐殺の写真集が強調するような暴行や、放火や、虐殺等の事実は、虚構のものであることは明白である。

ところで、私は出征に際し、当時愛用していた小型撮影機「パティーベビー」を携行していた。そして部隊行動の概況を記録のために撮影し、隊長の許可を得て、公用便に託して内地送付し、それを保管してもらつて、現在も四百フィート缶二巻を保



稲垣 満  
1911 (明治43) 年生まれ。  
当時第16師団輜重兵第16聯隊第6中隊獣  
医官 獣医少尉



パティベビーで撮影中の稲垣氏

有している。

この中には捕虜收容所の様子を撮影したものもある。この場面については、雑誌『正論』（平成十五年二月号）において東中野修道教授に紹介してもらった。これで分かる通り日本軍が捕虜を受け付けず、捕虜はすぐ殺してしまったということは虚説である。



水餃子の露店。日本兵のお客第一号のようだ（12月15日）

# 南京大虐殺はなかった

市川治平氏の証言（毛筆文書を富澤が要約）

（1）『南京戦・隠された記憶を尋ねて……元兵士二〇二人の証言』（松岡環著）の虚構

「二〇二人の証言」は、編者が机上

で作りに上げた小説で、実際に南京戦に参加した我々兵士に会って、聞き書きしたものとは思われない。少なくとも歩兵三十三聯隊に関する記述については虚構であると断言できる。

その理由は、われわれは郷土部隊として出征したのであるから、お互いによく知っていて連帯感がある。誰かがこのようなインタビューを受ければ、直ちに相互に連絡し合っ

しかるに、このようなインタビューがあったことはわれわれの耳には全く入ってこなかった。しかもこの証言には次のような不審な点がある。

イ・事実関係の叙述が当時と違って、南京戦に実際参加したかどうかは疑わしい。

ロ・ほとんどの人が匿名で所属部隊の明細が記述されておらず、これでは架空の人物がいくらでも登場できる。

ハ・平成十二年の調査であるときとされているが、当時の南京戦参加者で三重県在住者は三十名未満である（富澤註／証言者一〇二人のうち五十

# ●参戦勇士9人が語る「南京事件」の真実



市川 治平  
1915 (大正4) 年生まれ  
当時歩兵第33聯隊第2大隊  
南京戦時第5中隊第1小隊長

陸軍軍曹

難しいに自制しあつて、慎んだもので、郷土の恥となるようなことはお互いに自制しあつて、慎んだもので

## (2) 我々出征兵士の心構え

九人が歩兵三十三聯隊の人とされている。  
ニ・陳述の内容を見ると、軍隊経験者としての常識がなく、普通ならいつまでも鮮明に記憶されている命をかけて経験した南京の実情も、誤って記述されている。

## (3) 南京戦では市民虐殺などなかった

我々が南京に突入したとき(昭和十二年十二月十三日午後二時)、南京城内にいた市民の全員が安全区に避難して、暴行など、出る状態ではなかった。当時の報道でも分かるとおり、十二月十五日、十六日ころの南京城内では、すでに市民が露店を開き、その街並を中国人警官が護っていた。

そして日本軍は将校といえども、軍の許可なく安全区には立ち入ることを禁じられていた。その中で大虐殺など起こるわけではない。私は南京には十二月より一月下旬までいて、南京のことは詳しく知っているが、大虐殺の話など聞いたこともなかった。

## 【解説1】

「証言者一〇二人」のうち五十九人が歩兵三十三聯隊の人とされているが、これだけの人数の証言を採ることとはそもそも不可能である。市川氏の指摘されるように、この著者の信頼性は非常に乏しい。

この市川氏の指摘については、『日本「南京」学会会報』十四号(十七号、および「南京」事件)研究の最前線(平成十七年・十八年合併号)



# 【再検証】南京で本当は 何が起ったのか

## 阿羅健一

南京攻略戦から  
70年目にしてようやく  
見えてきた真実とは？

国民党による戦時宣伝が「南京大虐殺」へと拡大して、いくプロセスを膨大な証言、史料をもとに解明した労作。

★定価1680円税別  
四六判18×26cm

【再検証】  
南京で本当は  
何が起ったのか

徳間書店

〒105-8055 東京都港区芝大門2-2-1  
TEL.048-451-5960 <http://www.tokuma.jp>

で「千カ所を超える誤認・誤記」と題して総括的発表がなされているので参照されたい。

このこと以外には、稲垣氏と市川

氏との証言に解説は特に必要なく、受入れられることばかりである。ただ両者とも第十六師団の所属で、ここで第十六師団の南京

敗残兵もいなかったもので、そのまますぐ東方へ逃げた中国軍敗残兵を追って、これを掃討し、一部を除いて、二度と城内には戻らなかった。

南京大虐殺はなかった

初歩兵第三十三連隊が三大派 陸軍軍曹

南京戦時中隊中隊長 市川治平

(一) 南京戦・開戦された前後も尋ねて「元兵士」二人の証言を虚構「〇二〇」証言とは証言と異なるものではないと思えます。編者として、証言と伝説との関係が、自ら机上で「既存の証言」を「小伝」情報と利用して作り上げた小説で、実際は南京戦に「参加」した兵士に会って、聞き書きしたものとは思われないうです。少なくとも三三連隊に属する証言については虚構であると断言できます。

「〇二〇」証言が「南京大虐殺があったとする主張が昨今大きく様を占出した事に危機感を持ち、大虐殺と今後

市川氏の手記

入城後の動きについて概略述べておきたい。

第十六師団も二つの旅団からなっている。歩兵第十九旅団は中山門から入城後、二日ほど中山東路の北の担当地域を掃討したが、住民も

歩兵第三十旅団は南京城の揚子江岸の玄関である下関に進出して中国軍の退路を遮断する役目を負うていたが、中国軍の逃げ足が早く十二日夜、南京から退却したので、任務は不十分にしかできなかった。十四日、一部は城内に入り担当の城の東北地区の掃討を行ったが、住民も敗残兵もそこにはいなかったの

# ●参戦勇士9人が語る「南京事件」の真実

げた中国敗残兵掃討を担当した。

歩兵第九師団が十二月二十四日頃、南京を去ることになった。南京を守備する部隊がいなくなるため、第三十旅団がこれに代って、南京を守備することとなり、この旅団の歩兵第三十三聯隊（の二大隊）が城の南部を警備し、歩兵第三十八聯隊（の主力）が城の北部を警備することとなった。合わせて約四千人程度と思われる。

## 【解説2】

以上八人の証言とその「解説」で、我々は南京城内の日本兵の動向を大局的に把握できるようになった。南京城内に駐留していた日本兵は意外に少ないのである。いずれにしろ、たったこれだけの人数で、どうして何十万という市民を虐殺できるであろうか。

# 日本軍に 怯えるものはいなかった

## 野中祥三郎氏の証言

### 1・南京への経緯

熊本県生まれ。中国との貿易を志

門から入り、七月下旬から八月はじ  
めまで五、六日滞在した。

し熊本高校を卒業後、専門学校で中国語を専攻したが、昭和十三年六月

### 2・南京探訪

召集、十三年七月入隊。門司港から上海へ、さらに部隊は中支奥に進む  
予定で、途中南京に立寄った。光華

上官の豊永喬少尉が、南京は日本  
軍が比較的長期に駐留した都市なの  
で、住民たちが日本軍に対してどう  
いう感触を抱いたかとい

う個人的興味を持ち、私は中国語が出来るので、滞在在午後四回にわたって中国民家十一軒を尋ね、民情を探った。

そこでいわゆる「南京事件」数カ月後の南京市



野中 祥三郎  
1915（大正4）年生まれ  
当時独立輜重兵第2聯隊第2中隊第2小隊  
（騎馬隊）

民の対日感情が、期せずして明らかになったのである。

### 3・当時の南京、市民の一般状況

市内は平穏で、特に日本兵は多くいて、新兵の私は敬礼ばかりしてい



お菓子をもらって大喜び（12月20日）

た。東西に走る目抜き通り（漢中路）には日本商店も多く見られた。P屋もあれば日本式風呂屋もあり、番台には熊本県出身の女が座っていた。大通りには人通りが多く、馬車、トラックは見られたが、乗用車は少なかった。

対日感情は悪くなく、女が恐れて日本兵を見ると逃げ込むということもない。我々は少しも警戒せずに街を歩くことができた。我々は小銃に着ける牛蒡剣だけを下げて外出したが、牛蒡剣はベルトに付き物なので下げたままであって、特に警戒して下げたわけではなかった。

我々は民情を探るために、大通りから小さな横道にはいって行った。おそらく漢中路の南の方や中山路の東の方であったろう。われわれが戸を叩いても、おじけたり、恐れたり、

いやがったりすることはなかった。

中国の民家は狭く汚く、生活のレベルは当時の日本よりはるかに低いようだった。煉瓦まで行かない煉瓦状に固めた土を重ねて壁とし、窓もほとんどなく、家の中には薄暗くて低く、二十ワットくらいの裸電球が灯っていた。

家の者に聞くと、彼らはそれでも、日本軍が南京に迫ってくると南京から疎開していったのである。治安の回復とともに南京に帰り、帰ってきたのは三カ月前、二カ月前、最近となっていた。

#### 【解説】

野中氏の言われるように、このように貧しい中国人のものを日本兵が略奪する理由はないのである。

また野中氏の証言は、南京の人口

の回復状況にも合っている。中国側は南京の三分の一は焼かれたと言いますが、このように帰還住民はちゃんと帰るべき住居があったのである。

**むすび**  
勇士たちの遺したもの

最後に、次のような話を紹介したい。

戦争関係の著書を数多く書かれていた伊藤桂一氏の『兵隊達の陸軍史』に次のような話が載っている。

終戦後、中国奥地から引揚げた部

隊は、上海まで貨車で輸送される区間があったが、停車する駅ごとに中国軍管理者に賄賂をわたさねば貨車を発進させてくれなかった。

その上、各駅では、貨車に群がってくる一般民衆の略奪を防がねばならなかった。もっとも治安のよい南京では、民衆は日本軍にこう言っています。

「雲南や四川の中国兵は言葉も通ぜず、しかも甚だ程度が悪い（強兵だが山中で戦争ばかりしていたからである）。それに比べると日本軍の方が

はるかによい」と。

このようにして南京駅頭で日本兵は市民によって暖かく送られたのである。

これはひとえに、最初に南京を占領した勇士たちが戦に強かったばかりでなく、その後の市民との接触においては、軍紀厳正の中にも常に暖かさを持って接触したからである。

それがよい慣例となって、その後の日本占領軍の模範となったと思われる。

**18年に及ぶ研究成果。大虚殺の虚構性を立証した決定的論考！**

**再現南京戦**

東中野修道



中国軍司令官の敵前逃亡、困難なゲリラ掃蕩、厳正な軍規。参戦者の日記、日本軍の「戦闘詳報」等の一次資料をもとに、南京の戦いの全貌を再現。虐殺の「根拠」が事実と異なることを証明する。定価1890円

草思社

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷2-33-8  
☎03(3470)6565 定価は税込  
<http://www.soshisha.com/>

# 温家宝首相への公開質問状

# 南京大虐殺を

# 証明できまますか？

「南京事件の  
真実を検証する会」

二〇〇七年四月十一日に来日した温家宝首相は十二日国会で演説をした。今度の訪日が「氷を溶かす旅」になることを願っている、と言ったすぐそばから「日本が発動した中国侵略戦争によって中国人民は重大な災難に見舞われた」とお決まりのウソを口にしていった。

日中戦争（正確には日支事変）は、中国共産党の策謀によって中国軍が盧溝橋で日本軍攻撃をしたことをきっかけに始まった。この小紛争では「あくまで局地解決を避け日中全面衝

突に導かねばならない」「局地解決や日本への譲歩によって中国の解放を裏切る要人は抹殺してもよい」というコミンテルンの指令にそって次々に停戦協定を破り、ついには全面衝突に発展させたのも共産党である。今ではこれを裏付ける資料がほぼ完璧にそろっている。にもかかわらず未だに「日本が発動した中国侵略戦争」などとぬけぬけといい、それを多くの日本の国会議員がごもつともと聞いて拍手しているのだから情けない。

突に導かねばならない」「局地解決や日本への譲歩によって中国の解放を裏切る要人は抹殺してもよい」というコミンテルンの指令にそって次々に停戦協定を破り、ついには全面衝突に発展させたのも共産党である。今ではこれを裏付ける資料がほぼ完璧にそろっている。にもかかわらず未だに「日本が発動した中国侵略戦争」などとぬけぬけといい、それを多くの日本の国会議員がごもつともと聞いて拍手しているのだから情けない。

ところで、大嘘といえは「南京大虐殺」なる大嘘をいまだに唱え、南京に「大屠殺記念館」を建ててグロテスクな宣伝を行なっているのが中国である。日中友好を唱えながら一方でこんな悪宣伝を行なっている中国政府の欺瞞性に怒りを覚えている人も多いであろう。

せっかく首相が日本に来てくれたのだから、この機会にこんな矛盾したことをしているのはおかしいのではないか、最新研究によれば、南京大虐殺などありえなかったことが判明

## ●温家宝首相への公開質問状



中国の人民、見てっか

(写真提供/共同通信社)

しているが、中国政府の責任者として、この問題をどのように考えているのかを聞こうというのが、次ページに掲げた公開質問状の主題である。

### 温家宝は何と答えるか

○七年は南京事件七十周年にあたり、十本もの南京関連の映画の製作が企画されていると伝えられるなど、ウソが国際的に広く認知されかねない危機的な年である。これに対する反撃として『南京の真実』というウ

ソを暴く映画をつくらうというチャネル桜の水島総社長が提唱したキヤンペーンに良識派が結集して、着々と制作が進行しつつある。

この動きとも連動しつつ理論的にそして包括的に南京事件の実態を解明し内外に広くこれを広めていく良識派を結集した組織をつくらうというところで結成されたのが、「南京事件の真実を検証する会」である。加瀬英明会長、藤岡信勝事務局長以下総勢十三名の委員によって、三月十三

日に創立され、小生も委員の末席に連なった。

四月九日、次ページの公開質問状の中国語原文を中国大使館気付で温家宝首相宛に発送した。同時にこれの日本語版、英語版を加えた、三

カ国語版の公開質問状を添付した報道関係者向けのプレスリリースを主要媒体各社に送付した。

また、外国人記者クラブの八十名のメンバーに対して、英文ニュースリリースを中国語版・日本語版質問状も添付して配布した。

すでにいくつかの海外メディアより、インタビューの申し入れなどの反響が来ている。

温家宝首相からの回答は未だ来ていない。それは当然のこととして理解できる。何しろ、ウソを基に組み立てられた南京大虐殺などという虚構を擁護弁解などできるはずがないからである。

では、あれは間違っていましたと正直に過ちを認められるかといえは、それは絶対にはかることではないだろう。もし温家宝首相本人に良心があったとしても、そんなことを認めませんでしたら、虚構によって成り立

## 温家宝國務総理閣下への公開質問状

このたび中華人民共和国國務総理温家宝閣下のご訪日に当たって、日中両国の友好を願う者として心より歓迎申し上げます。

さて、われわれは一九三七年十二月に行なわれた日中南京戦に伴って起こったとされる所謂南京事件を検証すべく、研究して参りましたのですが、貴国のこの事件に対する見解につき、重大な疑義を抱いております。以下その中心的な疑義につきまして閣下のご見解を伺いたく、謹んでご質問申し上げます。

一、故毛沢東党主席は生涯に一度も、「南京虐殺」ということに言及されませんでした。毛先生が南京戦に触れているのは、南京戦の半年後に延安で講義され、そして「持久戦論」としてまとめられた本の中で「日本軍は、包囲が多いが殲滅が少ない」という批判のみです。

三十万市民虐殺などといういわば世紀のホロコーストとも言うべき事件が本当に起こったとすれば、毛先生が一言もこれに触れないというのは、極めて不自然で不可解なことと思います。閣下はこの事実について、どのよ

うにお考えになりますか？

二、南京戦直前の一九三七年十一月に、国共合作下の国民党は中央宣伝部に国際宣伝処を設置しました。国際宣伝処の極秘文書『中央宣伝部国際宣伝工作概要』によりますと、南京戦を挟む一九三七年十二月一日から三十八年十月二十四日までの間に、国際宣伝処は漢口において三百回の記者会見を行い、参加した外国人記者・外国公館職員は平均三十五名と記録されています。

しかし、この三百回の記者会見において、ただの一度として「南京で市民虐殺があった」「捕虜の不法殺害があった」と述べていないという事実について閣下はどのようにお考えになりますか。もし本当に大虐殺が行なわれたとしたら、極めて不自然で不可解なことではないでしょうか？

三、南京安全区に集中した南京市民の面倒を見た国際委員会の活動記録が「Documents of the Nanking Safety Zone」として、国民政府国際問題研究所の監修により、一九三九年に上海の出版社から刊行されています。

それによりますと、南京の人口は日本軍占領直前二十万人、その後ずっと二十万人、占領一カ月後の一月には二十五万人と記録されています。この記録からすると三十万虐殺など、ありえないと思いますが、閣下はいかが

## ●温家宝首相への公開質問状

お考えでしょうか？

四、さらに「Documents of the Nanking Safety Zone」には、日本軍の非行として訴えられたものが詳細に列記されておりますが、殺人はあわせて二十六件、しかも目撃されたものは一件のみです。その一件は合法殺害と注記されています。こういった記録と三十万虐殺という貴国の主張しているところとは、到底両立し得ないと考えますが、閣下はいかが思われますか？

五、南京虐殺の「証拠」であるとする写真が南京の虐殺記念館を始め、多くの展示館、書籍などに掲載されています。しかし、その後の科学的な研究によって、ただの一点も南京虐殺を証明する写真は存在しないことが明らかとなっております。

もし、虐殺を証明する写真が存在しているのでしたら、是非ご提示いただきたいと思えます。そのうえで検証させていただきたいと思えます。

六、このように、南京大虐殺ということは、どう考えても常識では考えられないことであります。それでもあつたとお考えでしたら、われわれが提供する資料も踏まえて、公正客観的にその検証を進めていただきたいと考えます。

ところが現状では貴国は南京に大虐殺記念館を建て、

大々的に三十万虐殺を宣伝しています。このようなことは、史実をないがしろにする不当極まりないことであるばかりか、貴国の唱えられる日中の友好の方針とも真つ向から対立するのではないかと考えます。更に本年は南京事件から七十年ということで、貴国のさまざまな機関が「南京虐殺映画」製作を企画し進めていると伝えられます。こうしたことは日中友好を願うわれわれ日本人にとって耐え難い裏切り行為と受けとめております。閣下はこれにつきどのようにお考えでしょうか？

以上の諸点につきまして、閣下のご回答を是非承りたく存じます。このことは多くの日中国民の関心事と考えますので、公開質問状として提出させていただきます。子子孫孫までの日中友好を願うものとして、閣下のご高配を、衷心から期待しております。

平成十九年四月十日

南京事件の真実を検証する会委員一同

(会長) 加瀬英明 (事務局長) 藤岡信勝

(監事) 富沢繁信 茂木弘道 (委員) 阿羅健一

上杉千年 小林太蔵 杉原誠四郎 高池勝彦 高山正之

東中野修道 溝口郁夫 宮崎正弘



っている共產主義体制の根本否定に  
つながつてしまい、体制崩壊をもた  
らしかねないからである。

したがって唯一採りうる対策は黙  
殺であろう。しかし、これは公開質  
問状である。世界の人々がこの問  
いが温家宝首相に対して発せられたこ  
とを知っている。

黙殺すれば、①中国政府は誠実性  
を欠いた無礼な国家であり②中国政  
府が問いに答えられないということ  
は、南京事件が虚構である証拠だと  
いうことが世界の多くの人々に認識  
される。

公開質問状は、五つの問いと一つ  
の要望から成り立っている。以下質  
問状の順に若干の説明を加える。

## ① 南京虐殺に触れない毛沢東

第一に挙げられた、毛沢東は生涯

ただの一度も南京虐殺などというこ  
とを言わなかったということである  
が、これは事実である。彼の選集の  
どこにも出てこないし、書簡集にも  
出てこない。最近世界的な話題とな  
っているユン・チアンの『マオ』（講  
談社）という大著があるが、そこで  
毛沢東を「南京虐殺を言わなかった」  
と非難している。

この本は五百人のインタビュ、  
そして情報公開されたソ連の文献を  
多用するなど貴重な情報を含む価値  
の高い書ではあるが、日本に関して  
は極めて陳腐な侵略国家観から抜け  
出ていない。

毛沢東が南京大虐殺に触れなかつ  
た理由は簡単である。そんなことは  
なかったからである。彼が情報に疎  
かったのではない。共産党は延安に  
逃げ込んだ時でも全中国に地下組織、  
情報網を張り巡らせていた。南京戦

時は国共合作時でもあり、首都南京  
の情報には十分に得ていた。そこで起  
こったことは、彼が『持久戦論』で  
述べている通り、「日本軍は包囲は多  
いが、殲滅は少ない」すなわち、日  
本軍は捕虜を原則として解放してい  
た。

もし世紀の大虐殺が本当に首都南  
京で行なわれたとしたら、毛沢東が  
これを全く口にしないなどということ  
はどう考えてもおかしい。

## ② 三百回の記者会見

このことは東中野教授が台北の国  
民党史館で発見した「極機密」の  
印が押された『中央宣伝部国際宣伝  
処工作概要』に書かれている。『南京  
事件—国民党極秘文書から読み解く』  
(東中野修道著・草思社)に詳しく紹  
介されている。

## ●温家宝首相への公開質問状

「一九三七年十二月一日から三八年十月二十四日まで、漢口で行なった記者会見では——参加者は一回平均五十数人であった。会見は合計三百回開いた」

「各集会に参加した外国人記者と、外国駐在公館の職員は毎回平均三十五人であった」

と書かれているように、南京戦を挟む一年足らずの間に三百回の記者会見を開いた。しかし、この三百回の記者会見において、国際宣伝処はただの一度も「南京で日本軍が市民虐殺を行なった」だとか「捕虜の不法殺害を行なった」だとかいう発表をしていない。また外国人記者から、「南京虐殺」に関する質問が出たという記録もない。

もし本当に南京で大虐殺が行なわれていたと仮定した場合、日本非難を主目的に行なわれていた国際宣伝処の記者会見で、全く虐殺に触れな

いなどということがありうるであろうか？

国際宣伝処は南京で何が起こったかを全然把握できない超無能宣伝処であったとしてもいうのだろうか？

もちろんそんなことはない。南京陥落後も『ラーベ日記』に名前が出てくる龍、周、韓、羅などの将校を始め多くの将校が安全区に隠れていて工作活動を行っていた。

また中国政府の顧問であることが判明しているベイツ南京大学教授（国際委員会委員）など外国人の協力者も存在していた。彼らから大量の情報伝わっていたはずである。

記者会見で「南京虐殺」を言えなかった唯一の理由は、それを言える確かな情報がなかったからであると考えるしかない。

そこで宣伝処が実際に取った方策が、ティンパーリーという秘密工作員に中立の新聞記者であるという偽

装の下に『戦争とは何か』という南京虐殺本を海外で出させることであった。これは一〇〇%国際宣伝処の活動の一環であったことが「極秘資料」に書かれている。

因みにティンパーリーはその後アメリカに本拠を置くTrans Pacific News Serviceという、これも中立を装ったニュースエージェンシーの責任者をやっている。まさに謀略の手下人であった。

### ③ 南京の人口は増えていた

虐殺が起これば人口はその分減少する、ということは小学生でも分かる単純かつ絶対的な事実である。

すでによく知られるようになったが、国際委員会の活動記録というべきものが「Documents of the Nanking Safety Zone」（以後Documentsの略称）と題して一九三九年に上海のKelly &

Wash 社から出版されている。これは中国政府の国際問題委員会が監修して出版されたものであり、中国政  
府としてもむしろ自分に有利なもの  
として出したのであろう。

この本に南京の人口がどう載って  
いるかといえば、陥落前の王固警  
察長官発表の二十万を前提として  
いるが、十二月中ずっと二十万と記録  
されている。

もちろん混乱のさなかで人口統計  
など取れるはずもない。しかし、肝  
心なことは逃亡した南京市行政  
府に代わって安全区に集中した南京市民  
の面倒を見た当事者である国際委員  
会の記録だということである。少  
なくとも人口減少が起こるような市民  
虐殺はなかったと認識していたから  
こそ二十万と記録し続けたのだらう。

それだけではない。ちょうど南京  
陥落から一カ月後の一月十四日には

人口二十五万と記録され、それ以後  
は二十五万とされているのである。

潜伏兵士あぶり出しのために日本  
軍が自治委員会と協力して行なった  
良民証の発行作業の結果、これまで  
予想されていたよりも人口が多いと  
いうことが分かり、国際委員会が二  
十五万に上方訂正したものである。

虐殺によって人口減が起こってい  
るといふ認識が少しでもあれば、こ  
んな上方変更は簡単に行なうはずも  
ない。誰も減少などは考えていなか  
ったというのが間違いない状況で  
あった。

中国政府の監修で出された  
Documentsに人口増と記録されてい  
ることを指摘されて、温家宝首相が  
どう驚き、どう弁解するか見たいも  
のだが、これも黙殺しかないだらう。

アイリス・チャンのように、安全  
区外に三十万の人口を人工的に捏造

しておいて、これが虐殺されたこと  
に捏造を重ねるしかあるまい（こ  
ういうのを自作自演という）。

#### ④ 二十六件の殺害のみ

人口減を引き起こすような大虐殺  
はなかったかもしれないが、多くの  
虐殺はあったのではないかと、思  
う人もいるかもしれない。

それすら国際宣伝が証拠として  
提出できるほどのケースがなかった、  
というのが三百回記者会見の所で述  
べた趣旨であるが、ではDocuments  
ではどうなっているか。わずかに二  
十六件しか記録されていないのであ  
る。

安全区というのは南京の一角に設  
定されたのであるが、三・九平方キ  
ロと、東京都でもっとも小さい中央  
区の四〇%弱の面積であった。ここ

に二十万の難民がひしめき合っていたのである。ここで起こった暴行殺害などは、四十万の目から逃れることは極めて困難であつただろうと推定できる。

真つ暗闇の夜間は、日本兵はほとんど外出できず、中国潜伏兵の天下であつたので、もし日本兵が不都合をはたらくとすれば日中なので、余計目に付いたはずである。

多くのクレームが中国人から国際委員会に持ち込まれ、委員はその根拠を確かめる余裕もないまま、それをタイプして出来上がったのが Documents 中の「不法行為の事例」である。したがって、ここに記録されているものは、中国人が一方的に言ってきたことを列記しているの、それが本当のことかどうかはかなり怪しいものが含まれている。

そうしたものを含めて、殺害に関する申し立ては合計二十六件で

ある。このうち、目撃されたものは一件のみ。しかもこれは誰何（だれか）されて逃亡しようとした兵士が殺害されたもので、「合法的なもの」と注記されているので、殺害からは除くべきものである。

すると、残りは二十五件となり、しかもどれも目撃者なし、という風間に近いものとなるのである。殺人は死体が残るが、死体のことが記されているのは三件のみ。ただし、その犯人が日本兵かどうかは特定されていない。

中国政府機関が監修して出した本に載っている殺人記録ですら、この程度のものである。

実は東京裁判で、上海派遣軍法務官であつた塚本浩次氏が「十二月から一月までに調べた件数は十件くらいで殺人が二、三件あつた」という趣旨の証言をしている。

法務官のところには憲兵が捜査し

た不祥事は全て上がってくる。風聞のもの二十五件（うち死体記述三件）という Documents の記録と、二、三件という塚田法務官の証言とはかなり符合しており、実態はどんなに多くても一桁ということだったと推定されるわけである。

この問いに対して、中国政府は被害者と「称する」人達の証言を基にこれに反論するかもしれないが、当時の記録との整合性がなさ過ぎるのは話にならない。特に、質問状の二、三、四、との整合性が全くないような「証言」は、事実とみなすわけにはいかない。

### ⑤ 虐殺を証明する写真なし

五番目に証拠写真のことが挙げられている。アイリス・チャンの本を初め多くの南京事件告発本には虐殺の証拠写真なるものが載せられてい

る。南京にある「大屠殺記念館」その他中国各地にある「歴史記念館」に多くの虐殺写真が掲げられている。

しかし、『南京事件——証拠写真』を検証する』（東中野修道・小林進・福永慎次郎著・草思社）で、こうしたところに類出する写真百四十三枚を厳密な科学的な検証を行なった結果、ただの一枚も南京虐殺を証明する写真がないということが明らかにされている。

ほとんどの写真は国民党中央宣伝部が一九三八年七月に出した『日寇暴行実録』とティンパリーの『戦争とは何か』の漢訳版である『外国人目撃中の日軍暴行』がその源流で、そこに掲載された写真がいろいろな書籍などに転載されるようになったのである。

一部の写真は、前述したティンパリーが責任者を務めるTrans Pacific

News Service からニュースリリースとして配信され、有名なAPまでがこれを使った。

日本軍将校が十字架に縛り付けられた捕虜を使って銃剣の練習をしていると称する写真がある。これはおかしいという抗議を受けたAPは最初は正当性を主張したが、とうとう非を認めてこれを取り下げたという事件が、『Lowdown』というニューヨークで発行されていた雑誌の一九三九年一月号に載っている。

この写真は、最初軍閥非難のプロバガンダ写真として上海で絵葉書として売り出され、次いで北方の共産主義者の捕虜虐待の写真として使用され、今度は満州での反日プロバガンダ写真として登場、次には紅軍掃討作戦のときの共産主義非難プロバガンダに使われ、APでは日本軍の暴虐写真として使われた、というこ

とが『Lowdown』に書かれている。

すでに戦前そのウソがアメリカで暴かれていた写真がその後も死なずに生きていて、南京虐殺証拠写真に使われるという、信じられないようなことが行なわれてきたのである。

アイリス・チャンの本には元日本兵村瀬守保氏が撮影した揚子江岸に浮かぶ死体群の写真も出ている。この写真は、新河鎮付近において四十五連隊第十一中隊との激戦に敗れて河に飛び込んだ兵士が流れ着いたものであることが判明していて、虐殺でもなんでもない。

村瀬氏は「私達輸送部隊はなぜか二週間ばかり城内に入ることを許されず」と、さも虐殺を見せないためのようなことを言っている。無知も極まれりである。そのとき百三十名ものジャーナリストが城内では大車輪で取材をし、写真を撮りまくって

いたのだ。

そして実はこんな虐殺写真を撮りました、と戦後になって言い出した人も皆無なのである。

もし、中国側でこれが証拠だという写真があるのなら、是非お出しいただきたいと質問状で言っているが、まあ出しようがないだろう。北朝鮮が横田めぐみさんのニセの骨を出してきたように、ニセ写真を出してくるとほど中国は愚かではないだろう。

「大屠殺記念館」を閉鎖せよ

これまで見てきたように、中国側

が五つの疑問点に答えることはまず不可能であろう。どう考えても「南京大屠殺」などというものは存在していなかったのであるから。

もし中国政府が本気で日中友好を願うと言うのなら、われわれの疑問に直接答えなくてもよいから、まず「南京大屠殺記念館」という悪質反日宣伝施設を閉鎖すべきである。

こんなウソをベースにしてどぎつく日本非難をしながら、日中友好とは一体どういうことなのか。まともな日本人に止まらず、北京オリンピックのために世界から集まるで

あろう人々がこれを見たら、重大な疑念を中国政府にもたざるをえなくなるであろう。

このウソまみれの「大屠殺記念館」を世界遺産にしようなどと中国政府が本気で考えているのであったら、とんでもないことである。それは自殺行為であることを警告しておこう。

何しろ証拠は十二分にそろっている。南京虐殺の大嘘を世界中に知らせることはさして難しいことではない。いつまでもウソをつき通せるものではないことを知るべきである。

(小誌二〇〇七年六月号より転載)

WACの話題の本

http://web-wac.co.jp/

第4回大宅壮一ノンフィクション賞  
受賞作、待望の復刊!

「30万人大屠殺」も「百人斬り」もなかった!  
「南京大屠殺」のまぼろし

鈴木 明

定価980円(税込)  
ISBN4-89831-546-1

WAC出版

〒102-0074 東京都千代田区  
九段南3-1-1久保寺ビル  
電話:03-5226-7622